平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	28Ｋ26	氏　名	関根　教博
研究主題 ―副主題―	評価方法の構築に向けた授業分析		
派遣先	早稲田大学教職大学院	担当教官	田中　博之
所属校	都立豊多摩高等学校	校長	大西　修

キーワード：学習評価、パフォーマンス評価

１　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

産業構造の変化や雇用の多様化など、社会状況は急激な変化の時代を迎えている。先行き不透明な時代においては主体的に他者と協働して課題を解決していく人材の育成が求められる。

ＯＥＣＤの「キー・コンピテンシー」をはじめ、アメリカの「21世紀型スキル」、イギリスの「キー・スキル」、韓国の「核心力量」という形で求められる力が示された資質・能力を示し教育に取り組んでいくのは世界的な流れといえる。

その視座に立って各学校、各教科は課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力を育てるための学習方法と評価の研究に取り組んでいる。

しかし、国立教育政策研究所教育課程研究センターが「高等学校では、知識量のみを問うペーパーテストの結果や、特定の活動の結果などのみに偏重した評価が行われているのではないかとの懸念が示されている」と指摘する。確かに多くの高等学校国語科ではペーパーテストを基準とした学習評価が行われている。

資質・能力に関わる領域を育成するためのカリキュラムや評価方法の開発が十分とは言えない。

２　研究の内容・研究の方法

研究方法は、東京都立中等教育学校指導教諭が実践した国語科学習を筆者が評価の視点から観察し分析を試みる。

対象授業は2016年（平成28年度）実施の公立中等教育学校国語科指導教諭によるに中等教育学校第５学年（高等学校第２学年）現代文Ｂ、単元名「『こころ』のレポート作成」である。

(1) 単元の目標

テーマに応じ、自分なりの観点から小説を読み、資料等を有効に用いながら作品に描かれた内容と社会や当時の読者との関係、作者の意図について論じる。

(2) 単元の授業の流れ

単元名：『こころ』レポート作成
総時間数：５時間
事前学習：全文を読み、基本的な内容確認テストを行う。
第１回：内容の確認
第２回：授業のねらい
　　レポートの書き方
第３回：ワークシート
第４回：個別面談後課題提出
第５回：レポート返却

３　研究の結果

本学習を評価の視点から分析すると、まず「診断的評価」が行われていることが分かる。

「診断的評価」とは生徒の学習の状況を見立てることである。単元学習の事前に夏期休業を活用して夏目漱石『こころ』の全文を読むことが課題となり、夏期休業後に『こころ』の内容、登場人物に関する心理を中心に 100 問の多肢選択型試験が行われる。学習者は試験の結果を受け、定着の程度に応じて学習を見直すきっかけとなり、『こころ』の読み直しが必要となる者も少なくない。指導者にとっては単元指導計画の調整や指導方法、学習支援の提示時期や代替など微調整をするための根拠となる。

次に事中に着目をすると「形成的評価」が行われていることが分かる。「形成的評価」とは学習指導過程或いは学習過程において目標達成度合いや学習者の伸長の進捗を見立てることである。第３回・第４回の学習活動は評価活動の一貫と捉えることができる。学習者は論文作成のために、取集した資料やワークシートを系統立てて整理し本時に臨む。授業者はポートフォリオを基に個別面談を行う。学習過程に応じた計画の進捗状況、参考文献の読み込み状況、意欲を確認する時間となり、学習に遅れがちな学習者の発見や学習者一人一人が抱える課題や不安に対応することで、学習面だけでなく情意面でも支援をする機会となる。この「形成的評価」は学習者の学習への気付きを促し、学びへと向かわせる評価活動であるといえる。

続いて「総括的評価」が行われる。「総括的評価」とは、単元の終末の成果を評価することである。本学習は学習者が提出したレポートを指導者が５観点のチェックリスト方式により評価をしている。

４　研究の考察

浜本(2006)は「単元及び単元時間ごとの学習目標を定めて学習指導場面を設定し、一人ひとりに達成の喜びを実感させるような自己評価力（メタ学習力）を育てていきたい。その自己評価力は自己学習力へと転化していくであろう」と言う。本学習は評価の観点から二つの特徴が見られた。①第３回、第４回に形成的評価の場面で生徒一人一人の学びを励ます時間が設けられ、自己学習力を育てていた点、②到達の観点を最初に設定し、生徒に示すことで自己評価力を育てていた点である。

５　今後の展望

本学習を評価の視点から考察した結果、事前の「診断的評価」、事中の「形成的評価」、事後の「総括的評価」は学習者の学びを促す学習活動として機能していることが分かった。評価活動を学習活動の一貫として意図的・計画的に単元構成に組込み、活用を試みた本学習は今後指導と評価の一体化を考える上で重要な指標となるに違いない。

しかし、今後より高い評価の構築に向け、本学習で用いられたチェックリスト方式とルーブリックを比較しそれぞれの妥当性を検証してみることが課題として挙げられる。また、採点者が複数いる場合における信頼性の向上や学習者の自己学習力の育成を図る単元及び授業開発などを考えていくことも授業改善を図る上で必要な視点となるであろう。